

小西甚一著「日本文藝史Ⅴ」講談社刊を読む

1. (1) 実際の口演ぶりが鮮やかに再現されたのは、柴田鳩翁^{きゅうおう}(1783-1839)の道話である。
(2) 18世紀前葉、石田梅岩(1685-1744)の創始による、いわゆる石門心学は、庶民の教導を重視し、そのため、わかりやすい話しかたで実践倫理を説き聞かせた。
(3) それが道話である。
2. (1) その本質において、道話は説教と別ものでない。
(2) だが、地獄・極楽の事を情緒的に述べる説教と違い、道話は、日常の行動を善いほうへ向かわせようとするものだけに、ずっと合理的であり、平明でもある。
(3) こうした道話の特色を際立たせたのが、鳩翁にほかならない。
3. (1) かれは28歳ごろから講釈を業とし、人気があったけれども、講釈に深みをもたせるため、漢学を修めた。
(2) たまたま梅岩の『都鄙問答』(元文4年刊)に接し、感激した鳩翁は、心学の徒となり、文政8年(1825)、43歳のとき、年収80両ないし90両も稼いでいた講釈師をやめ、心学の布教に専念する。
(3) ところが、文政10年、かれは失明してしまう。
4. (1) 鳩翁とは失明後の号である。
(2) これは、かれにとって大きい不幸だったけれども、その布教活動はいよいよ積極的だったばかりでなく、他の有力な石門学徒に見られない独自の成果を生み出している。
(3) それは、洗練された話しことばによる文章の創始、およびその公刊という社会的な事実である。
5. (1) 鳩翁の心学講席は生涯に1000回を超えたといわれるが、そのうち10回分を養嗣の遊翁が筆録し、数次にわたり刊行された。これが「鳩翁道話」である。
(2) 遊翁は、長年にわたり鳩翁の講席に侍坐したから、普通の筆録と違い語りぐちを生き生きと写し出している。
(3) 会話の所には、演者のジェスチュアが入ったのであろう。
6. (1) 語体のうえからは、地の文まで口語で押し通した点に注目したい。
(2) 滑稽本や人情本にいたるまで、戯作の口語使用が会話部分に限られるのと比べ、徹底した口語体といってよく、明治中期のいわゆる言文一致小説よりも言文一致的だからである。

<コメント>

江戸時代の思想家、石田梅岩の教えを広めた一人である柴田鳩翁について知る人は、今は少ないようです。人気の講釈師であった彼は、梅岩の名著「都鄙問答」(岩波文庫)に接し感激。心学の布教に専念、その後、失明。洗練されたことばの創始、養嗣の遊翁の手による筆記でその公刊を果たします。先生が「ものごとの本質的理解」を果たした後、先生(教え手)が自分自身のことばでその内容をわかりやすく伝えることで、教わり手(塾生)の理解は一気に促進し、感動さえ生まれます。このよい例が、石田梅岩の教えを伝えた鳩翁と考えます。

2023年11月20日(月) 林明夫